

秋の彼岸によせて

平成十年九月 大乘寺 副住職 岡 光俊

人は、「慈悲」、と何気なく使用している言葉においても、自分の身勝手な想いで、「慈悲」という言葉を使ってしまっているものです。

「慈悲」と言葉で発しながら、慈しか望んでいないのではないでしょう。うしろの悲、苦しみを与えて欲しいと望んでいるかたは、おられるでしょうか。

何故、佛さまは、人には悲しみが必要だと申されるのでしょうか。

それは、感謝の心を育てるには、悲しみ、苦しみを潜り抜けた人しか、その心は持たせて頂けないからでしょう。贅を尽くした生活をさせて頂いているかたほど、怒りっぽく不平不満が多い。貧の者からすれば、羨ましい生活をされているのに、なんの感謝もない。すべてが当たり前前に映るようです。

感謝も色々ございますが、第一の感謝は両親に対してであります。まずご自身の今あることは、ご両親がおられたからであり、いくら理屈をこねるかたでも、まず自分の肉体がここになれば、なに一つ感じることもできないことは、お解り頂けるでしょう。その親に、心から感謝させて頂き、お仕えさせて頂くことが感謝の第一と思われれます。

そして第二は、その両親にはまた、その親、即ち、ご先祖さまがおられたわけで、そのなかの一人のかたが欠けても、今の自分がないと気づけば、何万年と続いたご先祖さまお一人、お一人に感謝ができるのではないのでしょうか。この一と二の感謝以外の、皆さまが日々感じておられる感謝は、利供養の感謝ではないのでしょうか。

秋の彼岸、心清く心静かに、親の大切さ、ご先祖さまの努力の尊さ、今あるのはご先祖さまのお陰と、本来の自分の存在に深く気づき、感謝させて頂くのも、彼の岸、悟りの岸に一時でも心を運ばせ

て頂けることとなるのではないでしょうか。

※人生を正しく歩む方法を、佛さまの教えを軸に、身と心におつけになりたいかたは、お気軽に、寺務所にお申しつけ下さい。

合掌